

対人援助における専門性を再考する

村本 詔司

専門性が何かということは必ずしも明らかではなく、その曖昧さを指摘するのが本稿の主な狙いである。日本語の「専門家」は、元の英語が professional, specialist, expert で、文脈に応じて解釈されることが必要である。語源的には、専門家とは、自らの信仰や高度な知識と技能を公言することで他者に信じさせたことに対する責任を引き受ける者ということになる。ある職業が専門職として社会的に認知されるために満たさなければならない条件がある。それに従えば、専門職かどうか疑わしくなる職業も出てくる。専門職化は19世紀初頭から始まって、ある職業を専門職に変容させる社会プロセスである。それは、イデオロギーとしてのプロフェッショナリズムを産みつつ、後者によって促進されてきた。自律性を有する職能団体は専門職化の担い手である。専門家による援助と非専門家による援助には重要な違いがいくつかあるが、小規模コミュニティでの実践におけるように、両者を明瞭に区分するのが困難な場合がある。

キーワード：専門家、専門職、専門職化、専門職団体、プロフェッショナリズム

It is not always clear what is meant by professionalism, and the author's intention is to point out its ambiguity. The Japanese word senmonka is the translation of three slightly different words "professional", "specialist" and "expert", and so needs to be contextually interpreted. Etymologically speaking, a professional is one who undertakes the responsibility for making others trust him or her by publicly informing them of his or her faith or higher knowledge and skills. There are conditions to be met in order for an occupation to be socially recognized as a profession. They put into question the claim of several occupations to be professions. Professionalization which began in the early 19 century is a social process which transforms an occupation into a profession. It has produced professionalism as an ideology and also been promoted by the latter. An autonomous professional body is the carrier of professionalization. Finally, there are some important differences between professional and non-professional helping activities, but it is sometimes hard to clearly demarcate them as experienced by practitioners in small communities.

Key words : profession, professional, professionalization, professional body, professionalism

領域の違いを問わず、どの領域であれ、専門家のいない近代社会は、それゆえ、専門家の養成を目指さない大学もまた考えられない。専門家とはそもそもどういう存在なのか、専門性とは何かといったことは、わざわざあらためて問うまでもない、ほとんど自明のこととされながら、専門的実践や専門教育が日々営まれている。だが、いざ問うてみると、思いのほか、その理解があやふやであることが明らかとなる。本稿は、これらの問いに対する答えを提供するものではない。むしろ、こ

の根本概念に関する種々の理解や問題点を示唆することで満足しようとするものである。

「専門家」の原語としての professional, specialist, expert

今日「専門職」や「専門家」と訳されているものと英語は、少なくとも3つ考えられる。professionあるいは professional, specialist, expert がそれである。さらに、第一の profession あるいは

professional には、その反対語から2つの異なった意味合いがあることがわかる。personal を反対語とする場合は、個人的あるいは私的との対立において仕事の意味されており、「仕事上の」とか「職業的」と訳されることもある。仕事場に私生活の問題を、あるいは反対に、私生活に仕事の問題を持ち込むことは、ともに、職業倫理においても、また、家族などの倫理においても戒められている。だが、実際には、professional と personal の区別はそれほど自明ではなく、しばしば扱うのが厄介で専門家の側の自覚を要求する問題である (Corey et al., 2003/2004)。さらに突き詰めれば、専門性が前提にしている、その混同が戒められている公私の概念の根本的検討が求められている (Arendt 1958; Habermas 1962)。

素人を意味する layperson との対立で云々される場合、professional は、専門的な知識と技能を備えた人で、後述する expert に近く、いわゆる玄人が意味されている。これは、layperson を professional にする養成教育の問題に直結する。精神分析運動の初期には、医師の資格を有する者のみが精神分析を実践できると考えられていたが、すでにフロイトはいわゆる素人分析家の問題を好意的に論じている (Freud 1926)。

第二の specialist は、generalist との対立で言われ、そこでは、知識と技能が、generalist では一般的なものであるのに対して、specialist では、特殊なものであることが言われている。たとえば、医師（一般医）という資格は generalist だが、その中でも内科医、外科医、産婦人科医、眼科医など、各科の医師（専門医）は specialist だと言える。さらに細かな、特殊な領域（たとえば、心臓外科、神経内科）となるごとに、それに通暁した specialist が要請される。医療以外の分野でも、generalist と specialist の対比は有効であろう。そして、どの分野であれ、専門家たる者は、generalist であると同時に、何らかの領域での specialist であることが期待されている。specialist でない generalist は専門家として無能かもしれないが、反対に、generalist ではない specialist だけの人間は、すでにドイツの作家、ジャン・パウル (Jean Paul, 1763-1825) によって「あらゆる専門家はその専門において一頭

のロバである」と揶揄されている。さらに百年以上の後にマルクス (Karl Marx, 1818-1883,) の『哲学の貧困』(1847/1950) において、「職業の白痴」あるいは「専門馬鹿 (Fachidiotismus)」という概念が確立された。一般的に言えば、近代社会や資本主義の根本特徴である科学技術の細分化と分業化はそれ自体専門性の確立において不可避で貴重ではあるが、それによって見失われてきた全体的展望の回復が専門家に求められている。

第三の expert は、特殊な分野に関する知識・技能において精通している者である。医療ミスをめぐる裁判の過程で、どうしてもその分野の権威や第一人者とされている医師を証人として喚問することが必要となろうが、その場合の彼あるいは彼女の証言は、expert witness と呼ばれる。

多くの場合、professional と specialist と expert は同一の人間において重なり合うであろうが、新米の医師は、professional であり、ある程度は specialist でもあるだろうが、とても expert とは言えないであろう。以上からわかるように、日本語の文献や議論で「専門家」なる語が用いられるときは、それが、どのような文脈のもとで使われているかに気をつけねばならない。

ここでは「専門家」の原語として professional を採用することにする。筆者の本来の関心事である職業倫理は、professional ethics だからである。specialist ethics や expert ethics なる表現は今まで目にしたことがない。professional は、specialist, expert を含みこんだ包括的な概念だと言えよう。

プロとアマ

professional は近年、NHK の番組「プロフェッショナル 仕事の流儀」などに見るように、「プロフェッショナル」とカタカナ表記されることが多くなってきている。しかし、実際には、随分前から日本人にはきわめて親しい外来語である。ただし、カタカナ表記されてきたのは、その全部ではなく、最初の2語「プロ」だけで、その下に、それが形容する名詞を置いて、「プロ野球」、「プロレス」、「プロの歌手」、「プロ根性」などという風に用いられてきた。これらの語を聞いたり、用いた

りしてきた日本人は、professional がどういうものであるかを、明確にはないにせよ、彼らなりに理解してきたと言える。

しかし、いざ、「プロ（あるいは専門性）とは何か」、あるいは視点を少し変えて、プロとアマの違いは何かと改めて問われると、たいてい返ってくる答えは、その仕事で金銭的報酬を得ているかどうかである。ところが、そうした答えがいかにも根拠に乏しいかは、プロという語を用いた文に注意を向ければ明らかとなる。すなわち、「それでもプロか！」や「さすがはプロだ！」という文で語られている「プロ」はけっして金銭的報酬を得ていることを指していない。むしろ、それを得るにふさわしいだけの、それ自体はとても金では代えられない、何らかの高次の質的なものである。金銭的報酬はその具体的表現に過ぎない。それゆえ、その内実が伴っていないからこそ、人は「それでもプロか！」と罵られ、伴っているからこそ、「さすがはプロだ！」と称賛されるのである。具体的には、日々の精進をうかがわせてくれる見事で高度なパフォーマンス、ファイン・プレー、サービス精神、マナーの良さなどである。

告白という語源から専門性を考える

それならば、professional は本来、どういうものであったのか？ それを知る手がかりを与えてくれるのが、語源である。語源は、単なる言葉の問題ではなく、それに込められた人々の生活ぶりや思い、人事についての理解、知恵などを示唆してくれる。

professional は名詞 profession の形容詞形だが、この名詞はラテン語の professere を語源とする。pro- は、前進を意味する progress から分かるように、「～の前で」や「～の前へ」を意味する接頭辞で、fessere は、それに con- という接頭辞をつけた confessere から confession ができたことからわかるように、告白することを意味する。つまり、～の前で告白することを意味する。それは何よりも、神の前での信仰告白であった。

しかし、神への信仰告白は、必ずしも孤独な心の中だけで行われるのではなく、人々の前でもなされねばならない。告白は単なる主観の吐露では

なく、根源的な関係性の現象あるいは出来事である。愛の告白がもっとも鮮やかに示すように、告白は、他の誰かに対してなされ、相手を巻き込み、相手に何らかの影響を与え、相手からの反応を呼び起こさずには済まない。そして、受諾であれ、拒否であれ、その反応に対する責任を引き受ける覚悟がなければ、人は安易な気持ちで告白などすべきではない。わたしがあなたに対して、自分がある神を信じると告白することは、暗黙のうちに、あなたもその神を信じてくれたらいいのという願望と、もしあなたが私の言葉を信じてその神を信じるなら、そのことに対して私は責任を引き受けるということの意味する。

告白は、信仰告白のような宗教的なものであろうと、医療や法律、福祉などの特殊な知識と技能の（名刺や看板などを通じての）公言のような、世俗的なものであろうと、人々にあることを信じさせ、そして、人々がそれを信じることにに対して責任を取ることを意味する。これは、当然、自分の能力の限界を自覚しており、自分にできないことに他者を巻き込まないことをも同時に意味している。そうでなければ、告白は詐欺と搾取にすぎない。聖俗を超えて、専門家とは本来、何かに関して人々を信じさせることに対する責任を引き受けることを選んだ人間のことであろう。

専門職であるための条件

今日、ある職業が専門職かどうかを判定するうえでいくつかの基準が認められている。たとえば、村本（1998, pp. 56-57）で紹介されているように、ピンコフスによれば、専門家とは、以下の8つの条件を満たした者である。①世の中に不可欠なサービスへの従事、②高度な知識の具備 ③専門職に固有の特殊な知識の応用能力、④自律性を備えて自己規制する能力を持つと主張する団体のメンバー、⑤倫理コードの承認と肯定、⑥自己研鑽と、行動と決定に対する個人的責任の引き受け、⑦自分だけの利益に対する公益の優先と、後者へのコミット、⑧経済的報酬に対するサービスの質の重視。筆者はここ数年、職業倫理の授業にあたっては、以上の8条件を以下の4条件にまとめている。

①社会に不可欠なサービス、②高度な知識と技能の具備、それゆえ、そのための養成教育機関の存在と、そこでの標準的なカリキュラムの制定と改訂、③自治（自律）を有する職能団体の組織と、そこでの倫理コードの制定と改訂、④自分と自分が提携している組織の利益に対する公益の優先、換言すれば、利益相反からの自由。

以上の条件に照らせば、はたしてどの職業が専門職と言いうのだろうか。一見れっきとした専門職であるように見えながら、実際は、疑わしい職業が少なくない。たとえば、健全で賢明な次世代を育成すべき学校の教師や、重大な事実をスクープして、それに関する世論を喚起し、国民を啓発すべき新聞記者や放送関係者は、どちらも自治を有する職能団体を持たない。教師は国策の末端実行要員、マスメディアは政府の広報機関に成り下がっているかもしれない。日教組は教師の労働組合であり、職能団体ではない。記者クラブは政府からの情報を独占し、フリーのジャーナリストやメディアを排除する特権的組織である。専門職の代表と見なされる医師でさえ、福島県や関東地方における甲状腺がんやその他の病気の増大が原発事故に由来する放射能被曝によるものかどうか、常に口を濁し、明言を避ける。それは、医師の資格剥奪や、医療界や大学での居場所を喪失するのを恐れてのことだろう。いわゆる専門職は、法的に根拠づけられることで社会での位置を確立し、身分と収入を保証されるが、その同じ理由で、その自治を、さらには存立まで失うおそれがある。企業からの広告とそれを束ねる大手の代理店に依存していれば、なおさらである。

専門職化

profession は太古から存在していた。最初の professional は僧侶や神官、シャーマンなどといった宗教家であろう。professional には、何か歴史を超えたものがあり、普通の人々より神々に近い存在というイメージがある。それは、professional の仕事は、人間の本质に深く関わっているからであり、その意味では、人類の歴史とともにあるとさえ言えよう。

しかし、その一方で、professional は、明らかに歴史的現象であり、時代とともに変遷してきた。ここで、その歴史に立ち入ることは、本論文の目的ではないので、ごく簡単に触れるにとどめる。

今日、それぞれ「専門職」や「専門家」と訳される profession, professional は、近代社会の産物であり、かつ、近代化の推進力のひとつであり、特に、専門職化 (professionalization) と呼ばれる社会的プロセスを背景にしている。もちろん、生計を立てる営みとしての仕事 (occupation, job) は人類の歴史とともにあるものだが、そのすべてが専門職だというわけではない。専門職化とは、ある仕事は、高度な統合性と適格性を備えた真の職業へと変容する社会的プロセスを指す。しかし、それだけでは、今日の専門職を規定するのに十分ではない。

専門職化はすでに 18 世紀の社会哲学者、アダム・スミス (Adam Smith, 1723-1790) によって提唱されているが、中世以来当時まで、専門職と言えば、神学者、医師、法学者でしかなかった。中世ヨーロッパの 4 つの学部を背景とするものだろうが、哲学者だけが専門職とされていないのは興味深い。これは、哲学者が本来、誰もがなりうるもの、否、誰もが何らかの意味ですでに哲学者であり、哲学者とは、社会のプロセスに飲み込まれず、これから独立した精神の持ち主であることを示唆している。

フランスにおける哲学教師を含めてさまざまな専門職が現れてくるのは、19 世紀になってからのことである。これは、科学技術の進歩に伴った労働の分業化を背景としている。

どの職業がいつ専門職化を達成したかを調査するうえで、その達成基準が問題となる。これも『心理臨床と倫理』(村本 1998) で紹介されているが、ウィレンスキー (Wilensky, 1964) は、以下の基準を定めている。①フルタイム労働、②訓練学校、③養成に関わる大学、④地域レベルの専門職組織、⑤全国レベルの専門職組織、⑥資格法、⑦倫理綱領。これらの基準に従えば、彼が発表した 50 年前の段階ですでに専門職として確立していたのは、会計士、建築士、土木技師、歯科医、弁護士、医師。専門職化が進行中でまだ周辺に位置している

のは、図書館司書、看護師、検眼士、薬剤師、ソーシャル・ワーカー、獣医。新しいところでは、市政担当、都市計画士、病院行政官。専門職かどうかは疑わしいのは、広告業、葬儀屋とされている。

ウィレンスキーの研究から50年後の今日、専門職の様子はさらに激変している。ソーシャル・ワーカーは今では周辺どころか、福祉業界では中心的な専門職の地位を確立している。50年前には予想さえされず、存在していなかった新たな職業が、技術革新とともに、次々と現れて、専門職化を達成しつつある。たとえば、移植臓器コーディネーターや遺伝子カウンセラー、サイバー・セキュリティー技師などはその代表であろう。

社会学者のマックス・ウェーバーによれば、専門職化のもっと顕著な特徴は、専門職による独占 (professional monopoly) と呼ばれる現象で、それは、以下のステップを踏んで達成されてゆく。①製品 (たとえば、薬品) の創造、②クライアントの利益の充足からサービスを分離すること (たとえば、治療の成否にかかわらず、患者から医療費を徴収する)、③欠乏状況の創造、④供給の独占、⑤集団メンバーの制限、⑥外的な競争相手の排除、⑦理論的に競合する市場価格より上での価格の固定、⑧供給者、⑨供給者の一元化、⑩内部における競争の排除、⑪集団の結束と協力の発展。

プロフェッショナルリズム

専門職化は、専門主義 (professionalism) というイデオロギーを生みながら、逆に後者によって推進されてゆく。professionalism には、肯定的と否定的の両方の意味合いがある。肯定的に語られる場合は、日本語では「プロ根性」とか「プロ魂」などとして訳される。仕事への誠意、情熱、精進などがそこで意味されている。否定的な面は、「専門家崇拜」や「専門家の傲慢」、「専門馬鹿」として語られる場合である。専門家とそのサービスを求めるクライアントの両方について言われる。ここでは、健康的な常識や生活の知恵などが過小評価されている。たとえば、風邪をひいたからといって、人は必ず病院に行くだろうか？むしろ、普通は、栄養と睡眠を十分にとって無理をしないよう

に生活を整え、風邪をこじらさないようにすることを心がけるであろう。この種の知恵が見失われると、悪しき意味での professionalism に陥ることになる。

悪い意味での professionalism に対する批判から、資格主義 (credentialism) という表現も生まれてきた。専門家として実践できるようになるためには、所定の訓練・養成機関で教育を受け、学位を取得し、国家もしくは団体が実施する試験にパスして、晴れて資格 (credential, certificate, licensure) を取得する。professionalism における「専門家崇拜」と同様に、credentialism では「資格崇拜」が言われる。これは、所定の養成教育を受けて資格を取得しているからといって、必ずしも実践家として有能であることの証明にはならず、むしろ、実践家としての有能さは、現場での経験を通じて身につくことの方がはるかに多いということを示唆している。

この養成教育か、現場経験か、という古くからの対立には、養成教育の中身や方法を改善するという技術的な対応で対処できる面と、より根本的に、専門職化とそれが求める制度化に対する反省と再考を要求する面の両方がある。

専門職団体

ある仕事を専門職に変容させるものとして考えられるものは、専門家としての資質 (qualifications) である。その中身を規定し、その資質の有無を判断し、それに従って、資質があると見なされた者のみに「専門家」としての実践を許可し、倫理コードあるいは行動規準などによってその実践を監督し、それ以外の者を実践から排除する組織が、専門職団体 (professional body, professional association, professional organization、日本語では普通「職能団体」と呼ばれる) である。元来は中世のギルドから由来するのであろうが、近代的な職能団体はすでに19世紀末には欧米に現れていた。

職能団体は非営利団体であり、それが擁護し、促進しようとするのは、第一に、それに属している会員の利益、第二に、彼らのサービスを受けるクライアントに代表される公益、第三に、自分たち

の職業である。従来は第二の倫理的な点が強調されてきたが、第一と第三も見逃してはならない。

職能団体を通じて専門家と非専門家が領域的に区分され、一種のヒエラルキーが形成される。社会学ではこれは、ウェーバー（Weber 1956, S.23）の言う社会的閉鎖（soziale Schliessung, social closure）の一つとしての職業的閉鎖（berufliche Schliessung, occupational closure）と呼ばれる。専門的な知識と技能はその専門職によって独占され、その職能団体に属さない者は、これにあずかることができない。

専門家は、通常、高い社会的地位、収入、特権などが保障され、その発言は権威ある者の言葉として尊重され、社会的エリート層を構成するものとなる。しかし、いつもそうだというわけではない。たとえば、介護福祉士や保育士などは、今後ますます社会に不可欠となるれっきとした専門職であるはずなのだが、彼らの給料は、結婚や、ましてや子どもを設けて一人前になるまで育てあげるには程遠いほどの低さだと言われている。ワーキング・プアでもある専門家は、それほど珍しくない¹⁾。

専門職団体の重要な課題の第一は、会員個々の専門家の資質向上を目指した教育プログラムの開発とその実施である。第二は、倫理綱領の策定と、必要に応じての改訂である。その目的は、①会員の倫理的実践のためのガイドラインの提供、②クレームをつけられた会員の非倫理性の判定と処分の指針、③団体のサイトへの掲載による公衆との信頼関係の構築と増進などである。第三は、専門的見識に基づいて国や地方自治体、企業、その他の諸団体に対して提言することである。

しかし、上述したように、職能団体は一定程度の自治を有するが、国家によってその身分や権益が保障される一方で、その自治は国家の都合で有名無実化され、専門的見識から国家などに対して提言するどころか、国策の執行機関や尖兵に成り下がるおそれがある。職能団体は、NPOであっても、必ずしも、彼らの専門的サービスを提供される公衆の利益を最優先するとは限らず、やはり、自分たちの権益の方を優先することもけっして珍しくない。

専門家による援助と非専門家による援助の違い

アンケートをとってみればわかるが、何か厄介な問題を抱えているからといって、人が最初から専門家を当てにするのは稀であり、普通は家族や友人、恋人、知人などに相談する。彼らにはどうしても話せない場合にこそ、専門家を訪れる。臨床心理学や対人援助を専攻する学生たちにもここ数年、授業のできるだけ早い段階で強調していることだが、専門家による援助は唯一の援助形態ではなく、特殊な形態であり、援助の形態は多様である。それで、本稿末尾の表1を示すことにする。

紙数の制約上、表をいちいち説明はしない。読んでいただければ、わかるであろう。ただし、この対比は、わかりやすさを目的としているので、故意に一般化、類型化しているきらいがあり、実際には、その例外や境界の事態などが少なからず存在することに注意してもらいたい。

たとえば、僻地や学校などの小規模コミュニティで実践する者にとっては、ましてや、そこで家族とともに生活する実践家にとっては、その専門性を貫徹することはほとんど不可能となる。たとえば、職業倫理上、非倫理的トラブルのもととして通常は厳しく控えられるべき多重関係は、そこではほとんど避けられない。このことは、従来の専門性が、個々人のプライバシーを守り、生活の場と仕事の場の物理的分離を要求する大都市の空間を前提にしてきたものであり、それが小規模コミュニティではうまく機能しないことを気づかせてくれる（Schank and Skovholt, 2006; 村本 2015）。本学の社会福祉教育に重要な貢献をされた故辻光文の夫婦小舎制の実践もそうだが、一般にコミュニティ・アプローチは上の表のどちらにもはまりきらない。結局のところ、専門性と非専門性の違いは、出発点や重心を個人と関係性のどちらに置くかという研究と実践の基礎的問題に行き着くことになる。

注

- 1) 水木昭道の『高学歴ワーキングプア』（2007）や『ホームレス博士』（2010）などは、大学院にまで進学して博士号を取得したエリートであるはずの数多くの研究者

表1 非専門的援助と専門的援助の違い

非専門家（家族、友人、知人 etc.）による援助	専門家（精神科医、臨床心理士、ソーシャルワーカー etc.）による援助
誰にでもできる（誰でも知っている）と期待されている→特別の教育や訓練は不要	誰にでもできる（誰でも知っている）とは期待されていない→専門教育、研修の必要
対象者：家族、友人など、閉じられた集団のメンバー	対象者：専門家の適格性に見合う者なら、誰でもなりうる
助ける者と助けられる者の役割は交代する（助け合い）、相互性（必ずしも同時ではない。子どもがまだ未成年のときは親に助けられる側だが、成人すれば親を助ける＝孝行）	専門家＝助ける者、患者＝助けられる者 立場、役割の明確な区別（交代しない）。 ただし、その区別がいつまで続くか（治療終了後、卒業後は？）については議論の余地あり
無料	有料
面接は、場所と時間を選ばない。しばしば、援助者、被援助者双方の生活の場と重なる	面接は、一定の場所と時間に限る（生活の場とは別）
価値観：明示	価値観：中立原則に基づき、非明示
援助のための団体は存在しない	職能団体に属す
生活者の倫理。組織的背景はない	職業倫理（informed consent, 守秘義務、多重関係の回避、利益相反の排除、禁欲原則 etc.）。職能団体などの組織的背景を持つ
今日の傾向： ①公衆の意識（権利意識の向上、専門的知識の普及、自助集団（self-help group） ②①に逆行する動き（政府・マスメディアによる情報操作、情報隠べい etc.）も強まってきている	今日の傾向： ①秘密主義→専門的知識の民主化、インフォームド・コンセント（informed consent）を得る努力 ②ただし、①に逆行する動きはなお根強い、あるいは、ますます強くなってきている。

が陥っている窮状を報告するルポルタージュである。

Weber, Max (1956). *Wirtschaft und Gesellschaft: Grundriss der verstehende Soziologie 4., neu herausgegebene Auflage*. Tübingen: Mohr.

文献

Arendt, H. (1958). *Human Conditions*. University of Chicago Press.

Corey, G., Corey M.S. and Callanan, P. (2003). *Issues and Ethics in the Helping Professions, Sixth Edition*. Pacific Grove: Brooks/Cole. ジェラルド・コウリー他 (2004) 『援助専門家のための倫理問題ワークブック』(村本詔司監訳) 創元社。

Freud, S. (1926). "Frage nach der Laienanalyse" in *Sigmund Freud Studienausgabe Band 11*. Frankfurt am Main: Fischer Verlag.

Habermas, J. (1962). *Strukturwandel der Öffentlichkeit*. Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.

カール・マルクス (1847/1950) 『哲学の貧困』(山村喬訳) 岩波文庫。

水月昭道 (2007) 『高学歴ワーキングプア』 光文社新書。

水月昭道 (2009) 『アカデミック・サバイバル』 光文社新書。

水月昭道 (2010) 『ホームレス博士』 光文社新書。

村本詔司 (1998). 『心理臨床と倫理』 朱鷺書房。

村本詔司 (2015). 「コミュニティ心理学と職業倫理」『コミュニティ心理学研究』 第19巻第1号。

Schank, J.A. and Skovholt, T.M. (2006). *Ethical Practice in Small Communities: Challenges and Rewards for Psychologists*. Washington D.C.: American Psychological Association.

